

20年度から「センター試験」→「大学入学共通テスト」

新入試にどう対応

私学、学習塾で取り組み加速

現在のマーク式の「大学入試センター試験」は2019年度の実施を最後に廃止され、20年度からは思考力、判断力、表現力がより問われる「大学入学共通テスト」が導入される。新しいテストの実施だけでなく、大学入試改革、さらには高校教育、大学教育を含めた「高大接続の三位一体の改革」が進む。学校教育は、「知識の習得」を中心とした従来の学習から、「知識の活用」を目指すスタイルへと大転換を迫られる。こうした改革に伴う「学び」の変化や最新情報を報告する。(大山勝男)

21世紀型教育に 取り組む各校

常翔学園中学では21世紀型スキルを身につける4つのプログラムを策定。その一つに実際に見て、自身で実験して検証するサイエンスプログラムがある。これまで再生可能エネルギーの性質を学び、環境に優しい



グループに分かれて全体追求の振り返りや、さらなる追求を行う類塾の新しい寺子屋「天才教室」

学習塾でも 課題解決型授業

40年以上にわたり大阪で学習塾を経営している類塾では新しい寺子屋「天才教室」を開講。「小学4年〜中学3年」のコースでは探求科「土」五教科「土」作文指南通信講座を組み合わせて人間力・追求力を鍛えている。

実際に探求科の授業を体験させてもらうと、5教科の枠を超えて、「能力・人間力・仕事力系」や「経済」などをテーマにした仕事の世界や社会の生々しい現象に対して「何?」「何で?」「どう?」のポイントを参加者全員で出し合って追求。さらに、6人前後のグループに分かれて全体追求の振り返りや、さらなる追求を行い、内容を定着、深化していく。類塾では「天才教室」の授業を保護者にもフルオープンしており、参加した中3男子の保護者は「子どもたちがこんな真剣に課題に取り組み、一人一人が自分の考えを持って、人に伝える



サイエンスプログラムで太陽エネルギーの測定をする常翔学園中の生徒

ることができていて感心させられました。私の方が勉強させられました。家でも息子と会話をもっと多くし、考えや意見などを聞か

思考・判断・表現力を重視

新里勝一郎講師は「自分の頭で考え、お互いの考え方、問題や解法への気づきを共有することで、自分一人の思考の壁を越え、思考力や発想力を深め広げたい」と話している。

今後、日本は急速に少子高齢社会を迎え、それに伴い、生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、産業構造や就業構造の転換などへの早急な対応が求められる。

一方で国際的にはグローバル化・多極化の進展、新興国・地域の勃興といった変動が起こっている。このような先の見えない状況のなかで、国は「自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための資質や能力を育む教育が必要である」という考えが改革のベースとなっている。

先が見えない 現代社会

今回、国が進める改革は高校と大学、そしてそれをつなぐ大学入試の一体的な改革だ。

高校では、学習指導要領の抜本的な見直しが進められ、教授・学習法のアクティブラーニングの視点からの充実が行われている。次期学習指導要領は「何を教えるか」だけでなく「どのように力を身に付けるか」という観点も重視する。適用は今の小学6年(18年4月時点)が高校生になった時から適用され、主体的に探究活動を行う科目が設置される。

また、大学入学者選抜では、現在のセンター試験を廃止し、これまで以上に思考力・判断力・表現力を中心に評価する「大学入学共通テスト」を導入する。

17年11月の共通テストの試行調査では、すべての教科で社会とのかかわりを意識した問題が出された。国語・数学の記述式問題は、資料や図表、テキストなどを理解し、条件に合った解答を記述する力が問われた。また、授業におけるグループワークの場面に扱われるなど「探究活動」を意識した出題も目立った。

大学では、アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)をメインに、カリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施方針)、ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)の3つのポリシーを軸として、教育を行うことになる。

センター試験	共通テスト
出題は「マーク式」問題	国語・数学は一部「記述式問題」が出題 ※それ以外はマーク式問題
「聞く」「読む」の技能 高校の授業で学んだ知識・技術が問われる	資格・検定試験を活用、「話す」「書く」を含めた4技能の力が試される。 知識・技能に加えて、思考力・判断力・表現力を一層重視

センター試験と共通テストの違い

バル化などの社会変化に伴い、コミュニケーションを取る手段としての使える英語力が求められる(大手進学塾の入試担当者)。このため、これまでの「聞く・読む」の2技能に加えて資格・検定試験を併用して「話す・書く」を含めた4技能が課される。